



## 「ゆとり」に関する心理学・精神医学的アプローチ

足利市立小俣小学校長 和田 史 楼

この小論は、昭和52年6月に、小学校長研修会の1分科会の研究資料として、私の考えを記述したものに、多少手を入れたものである。分科会のテーマは、「ゆとりのある充実した学校生活」をどう受けとめ、考察するかであるが、本論に入る前に、「ゆとり」ということをどう考えるかによって、教育の方向が変わってくるのではないかと考え、共通理解を深める意味で、私の見解を発表した。というのは、13年位前に東京教育大での1年間に留研修が修了した時、当時の文学部長山田栄教授の話の中に、学問という言葉は、ギリシャ語の語源では「ひま」と同義語であるということで、学問は本来人間に「ひま」がなければできないものなのだ、心のゆとりを持って下さいという意味のことが、頭にあったので、私なりにいろいろと考えてみたのである。その結果「ゆとり」を単なる時間的な余裕とのみしか考えられないものと、後述する意義を踏まえての教育では、大きな違いが生ずるのではないかということに気づいた。そこで、ちょっと変わった角度から論じたものであるが、この拙論を踏台にして、大方の先生方が「ゆとり」について考えていただけたら幸である。

### 1 新指導要領から

最初新指導要領の基準の改訂の基盤となる事項に目を通して、その中から私なりに考察してみたい。煩瑣になるが、新指導要領の方針と思われる内容を記述しておきたい。

新学習指導要領は、教育課程審議会の答申を尊重して、○ 学校教育の現状が知識の伝達に偏っている傾向を改め、○ 自ら正しく判断できる力を持つ児童生徒の育成を重視し、次の方針に即して作成したと文部省では発表している。さらに「学校教育の現状や今日の社会状況からみて、これからの学校教育において重視すべき点」として、次の方針を打ち出している。

上記の文の中で、「 」内の意味を、私はこれを「従来（現在までの）の学校教育や社会環境によって育成された現状の人間像を通して反省する」という視点で受けとめ、「将来の教育を展望して」学校教育の重視すべき点を押えることの必要性を強調したい。

新指導要領の方針として、

- 創造的な知性の育成、自然愛、人間愛、郷土愛、正しい勤労観などの徳性の涵養、たくましい身体育成などに配慮して、各教科の内容を構成し、知徳体の調和のとれた人間形成が図れるようにするとして

#### ① 各教科の内容を精選する

- ・ 小・中・高校の一貫性を図ること。
- ・ 児童生徒の学習負担の適正化・学習の適時性。
- ・ 各学校段階及び各学年段階において、確実に身につけさせるべき基礎的、基本的な事項に精選すること。

#### ② ゆとりのある充実した学校生活を送らせるために、

- ・ 各教科の授業時数の削減を図る。

- ・ 地域や学校の実態に即して、授業時数の運用に創意工夫ができるようにする。

### ③ 基準の明確化

- ・ 各教科の目標・内容については、基準を明確にする。
- ・ 各学校で指導すべき中核的な事項のみ示す。(細部にまでは規定しない)
- ・ 教師の創意工夫を加えた学習指導の展開。

以上は 文部省発表や文部大臣談話の要点をまとめてみたものであるが(6月19日現在で)、この中から、上記の改訂の方針を踏まえながら、前記の現代人の人間像と、「ゆとりのある充実した学校生活を通しての人間形成」という発想の、根底にあるものは何かを考察してみたい。

## 2 教育は人間形成の重要な要素

産まれて間もない新生児は、全く無能無力の存在で、そのままに放置すれば立所に凍死したり、餓死してしまう。従って乳幼児は、家庭における手厚い養護と指導、しつけによって、だんだんに自立から自律への段階をたどって成長する。そして、将来人間として生きて行くために必要なパーソナリティ(人格・性格)や諸能力の基礎が、幼少時の子どもの時に培われる。さらに、家庭教育・学校教育・社会教育を通して、無意図的教育・意図的教育の営みによって、人間形成が行われるものである。

従って教育は、人間形成にとって欠くことのできぬ重要な要素であると云い得よう。その意味で、学校教育と人間形成は最も緊密な因果関係を持っているが故に、現代の人間像は、今までの学校教育に負う所が大であり、また社会環境からも大きな影響を受けて、形成されたものと考えて良いであろう。

とすれば、「学校教育の現状や今日の社会状況からみて」という改善の発想の動因は、現代の人間像に対する反省と、その人間像に対する社会の批判や思潮を考慮したものと、理解しても無理ではあるまい。私は学校教育の現状を形式教育の立場から、教育制度や教育内容の検討をすることよりも、教育の結果形成された人間を対象に考えることの方が、より真実の教育に近いものであることを確信している。この意味で私は、現代の人間像にスポットをあて、その精神構造にポイントを置いて考えてみたのである。

ただし、人間像を考え描き出す場合、その背後にある進学入試問題、教育制度、社会構造、経済変動、<sup>思想的</sup>背景等に対する、教育学・社会学・哲学などの面からの考察は、極めて重要であることは論をまたないが、それはひとまずおいて、ここでは心理学・精神医学の面から、その精神構造を考え、「ゆとり」について考察して行きたい。

## 3 現実への過剰な適応と遊離の二面性

### ① 狂気の様相を呈する現代

ここ数年来の日本の社会現象を見ると、狂気としか云い得ないような様相を呈している。三島由紀夫の行動、黒いピーナツと飛行機の自爆、三里塚の農民や学生の熱狂的闘争、浅間山荘の激闘、大久保清の狂気じみた犯罪、現職警官の暴行殺人、暴走族の異常な行動等、数えあげたらきりのない程、狂気じみた行動や、わけのわからぬ出来事が、いかに多く頻発していることか。

また日常的経験だけではなく、文学・美術・演劇・映画等の芸術や人間の創作活動の面でも、

同様の現象が増加している。自然的密着（20thの初期までの傾向）から、むしろ離反傾向にあるのが現状の思潮であり、特色ともいえよう。

ところが、異常な行動や犯罪の当人や、異常な芸術表現の作家の多くは、意外にも正常な精神の人間であることがほとんどである。彼等は決して精神的疾患や精神異常者ではない。狂気の人間ではないということ（精神医学の面からみて）は、これはどういうことなのか。とにかく、彼等の日常的な生活と、異常な行動または創造活動とは、たいへんなちがいがあるといふことである。

いったいこれは何を意味するものなのか。

## ② 現実と現実像

問題は、「現実そのものと、彼らが現実について抱くイメージ（現実像）」とのくいちがい・へだたりが、これを解明するキーであると思われる。そのことについて考察してみよう。

現代は一方で人間に現実への適応を過剰なまでに強いていると同時に、他方では現実から遠ざからせることにより、現実との生き生きとした接触を失わせているという、相反する二面性をもっている。現実への過剰な適応は、人間に過度の緊張をもたらす。

例えば、成人病（高血圧、ガン、心臓病、各種の胃腸疾患、糖尿病）は、もともと老人に多い病気である。ところが平均寿命が75～76才に延長しているにもかかわらず、今日では逆に50才代、40才代へと年齢が低下して、成人期にひろがり定着化の傾向にある。今日では35才からの検診の必要にせまられている。

成人期というのは、心理学的には自我と社会との適合が、もっと安定した時期である。それにもかかわらず、この年代層に上記の特有の病態が浸潤しているのはなぜだろうか。

ガン以外の成人病の病態は、心身症つまり精神身体症の領域のものだという点は、現代の医学の定説となっている。その大部分が純粋な身体の病態ではなく、多少なりとも心理的因子が関与して、今日ではれっきとした心身症の中に組み入れられている。これらの心身症は、各種の心理的ストレスにもとづくものであることはいままでもない。私は52年9月、京都で開かれた第4回国際心身医学会に参加したが、このことが各国の学者によって論ぜられ、各種の心理治療（特にASCやATの臨床効果）について発表された。

こういう病態の浸透は、ちょうど日本経済が高度成長をとげつつあった時期と、符節を合わせたとように一致している。即ち、成人病の年齢低下の浸透度の傾向を表わすカーブと、高度成長の上昇カーブとが、大体一致しているということである。

各種企業内では、より生産力・販売力を高めるために、年功序列制にかわってプロジェクト・チームが編成され、業務へのより密着した関係が生じてきた。そのためにモーレツな仕事ぶりや対人関係が強いられるようになった。（モーレツ社員や脱サラリーマンの問題）当然、同僚との激しい競争関係や対人関係の緊張や葛藤が生じやすくなる。過度の心理的緊張やコンフリクトは、精神身体に強く影響し異常を来たす。しかもこれらは、本人には無意識の内部（深層心理）のできごとであることが多い。

一方、科学・技術の恐るべき発達と変化は、高度成長の波に乗って、人間をとりまく環境を激変し、おびただしい公害（音響や空気・水質・食品汚染や交通戦争等）を引き起した。このこと

も心理的緊張や不安感を生ずる一因となりやすく、社会的不安と相まって、無意識のうちに人間を痛めつけ、神経症に陥り易い傾向が作り出されてきた。

人間は過度の緊張・抑圧・葛藤には堪難い。これらはいずれも前記の病態や神経症の要因となりやすく、ここ10数年来新しいタイプの神経症の増発が見られるのも、ここらに関係があるのではなからうか。

これと同じことが教育の面でも児童生徒に発現している。入試やテストにかかわる問題、教育ママ、ガリベン、乱塾の問題、落ちこぼれ、子どもに必要なあそびの喪失、生き生きとした自然からの遊離等、教えきれぬほどの問題が児童生徒をとりまいている。一方家庭や学校の過保護から生ずる児童生徒のトレランス(耐性)の低下・欠除と相まって、欲望の増大、自己中心、自己統制力の低下等の傾向が強くなってきた。そのために、児童生徒の自殺・家出・性的非行・登校拒否・緘黙・各種の神経性習癖等の発現が増加の傾向にある。

つまり、現実との過度の密着は、人間の正常で健康な精神の障害となるということ、私は云いたいのである。

### ③ 作り出された偽<sup>にせ</sup>の現実

一方に現代人は、自宅の四畳半から一步も外に出ずに、ブラウン管を通して日本国内はおろか、世界中のあらゆる情勢を眼のあたりに見ることができる。また詳細な記録や解説は、新聞・雑誌の活字が十分に提供してくれる。全米の新聞発行部数より、日本の1~2の新聞社の発行部数の方が多という現況、また街には低級・雑駁<sup>ばく</sup>な記事の充満した諸雑誌が氾濫している。将に情報化時代である。生の情報<sup>なま</sup>より、テレビ・新聞・雑誌を通しての情報の方がいかに多いか。

さらに、カラーテレビはより強い現実感と迫真性を与えてくれる。従って、現実と現実感がしばしば融和し、一体となる。テレビタレントを街で偶然見かけた時に、あれっ、誰だったかなあ、どこかで会ったようなと、錯覚に陥った経験を持つのは、あながち私一人ではあるまい。よく聞く話である。それだけに、選挙のご三家のひとつとして、タレントが駆り出される。映像によって作り出されたにせの現実感が、あたかも真実の現実のように、親近感を与えるからである。

この現実にはにせの環境(Pseudo-environment)であるが、本人にとっては「にせ」と考える標識はなにもない。従って、現代人の抱く現実像はますます拡大するのひきかえ、なまの経験(ほんとうの現実)は相対的に縮少して行く傾向が強い。登校拒否やその傾向の強い児童生徒は、一日中テレビにしがみつき、マンガに没頭している場合が多いので、彼らが頭の中で考えることと、現実の行動とは全く噛み合わない。その大きなズレが増大して、ますます症状を悪化する。リースマンの云う「孤独な群集」が多くなってきているのが現状であろう。

## 4 ゆとり

現実との密着と遊離の二面性の問題は、心理学的には適応(adjustment)の問題であるが、これを現象学的にとらえれば、現実との距離の問題である。フランスの精神医学者ミンコフスキーの言葉の「生きられる距離」という、人間本来の体験の問題であろう。

「生きられる距離」とは、機械装置の「あそび」のようなもので、あそびの空間が機械には絶対

必要であることは、周知のことであろう。人間（生体）と現実とのあいだで適切に保たれていて、両者の相互作用の際に、緩衝的な役割を果たすものである。この距離が近すぎれば、人間は環境に支配されて主体性を失なう。脱サラリーマンを叫ぶものは、主体性の回復を願うものであろう。

離れ過ぎれば人間の主体性は強固に保持できるが、現実から遊離すると精神病的状況に落入る。現実との接触を失なって、自閉的傾向が増大する。あるいは、社会の流れからはみ出したアウトサイダーの生き方をたどる。

人間は本性上外部の環境には、全面的に順応することはできない。外界の温度に対して変温することはできないし、保護色の機能もなく、生物学的反応はきわめて低い。現実に対して、常にいくらかの距離（へだたり）を持つのが、人間の真性である。その距離をうめ合わせるために、より人間的な適応をもとめて創造活動を営んで行く。

寒さに耐えないから衣類を考案し、足が弱いから履物を作り、さらに遠くに早く移動したいから車や飛行機を発明し、生の食物は胃にこたえるから調理を工夫する。このように考えると、人間の文明は環境との不均衡をうずめることにより、促進されてきたと云い得るのであろう。この緩衝的役割が人間の創造的活動を促進し、文化の総体はここから生まれていると考えてもよいであろう。

私はこれが「ゆとり」であると考えたい。この主体と現実の相互作用の際に、緩衝的役割を果たすものが「ゆとり」である。その意味でゆとりは人間生活にとって重要なものであり、人間の真性にとっても欠くことのできない必要なものである。従って、ゆとりを単なる表面的な文字上の観念で受けとめると、余裕やひまに近い意義のみにとどまり、改訂の精神を生かすことはむずかしい。

## 5 むすび

児童生徒が心身ともに安定した状況の下で、より充実した学習生活ができるためには、学校全体の教育活動がゆとりのあるものとするのが大事であろう。そのために、一方法として教科の内容を精選して児童生徒の学習負担を適正化し、授業時数も減らす（10%）。その時間を学校の創意を生かした教育活動にまかせると示めされている。しかし、これを「ゆとりの時間」と称して、その時間の活用内容を苦慮し工夫することのみを考えるのであっては、真の「ゆとりのある充実した学校生活」の具現からは、遠いものになってしまうのではなからうか。

前述の通り、現実密着と遊離の二面性を持つ現代人は、狂気の状態（どこかが狂っている）に落入る危険性を多分に現有している。さらに現代は高度の科学技術が急激に発展し、恐るべき変化と激動の時代であり、それだけに人間性を阻害し、神経症や心因性の諸疾病に落入り易い諸条件に満ちている。豊かな人間性とはかけ声だけで、現実<sup>じん</sup>は逆行の諸様相を呈している。その意味からも、児童生徒の人間形成の上で、健康な精神と強靱な耐性の育成は、これからの学校教育の重要な課題であろう。

従って 学校生活のゆとりとは何か、また学校にまかせられた時間をどう生かすかについては、慎重に根本から考えるべきではなからうか。その意味で、学校の創意にまかせられた内容を考える基盤として、私は前述の考察から次の点を押えておきたい。

### ① 児童生徒の主体性（人間としての）を絶対尊重すること。

児童個々の主体性を重んじた内容であることは、第1条件として押えなければならぬ。

② 児童生徒の創造活動を促進するものであること。

子どもの自由で伸び伸びとした活動の中から、創造性が芽生え、伸展する。専制的、強制的な教育活動からは、創造性は育ち難い。

③ なまの体験や行動を生かす活動であること。

行動や体験を大事にした教育活動こそ、教育の本質に立った指導といえよう。なまの体験や行動を通して、生き生きとした現実との接触を図ることができる。

④ 入試や成績に直結しない活動であり、テストや評価は除外すること。

テストや評価に制約され、入試や成績に関係があるとなると、ゆとりは失<sup>う</sup>せて、あせり（緊張）が生ずる。子どもの自由で、のびのびとした人間性の育成は期待したい。

その他考慮すべき点は多々あるが、もっとも基本的な考えを押えて、各学校の独自性や創意による工夫が生かされることが、望ましいことであろう。

最後に、私は上記の考察から次のことを申し添えておきたい。

教科、道徳などの授業は、児童にとっては厳しい現実であるが、授業が児童にストレスを生じさせるようなものであってはならない。従って、個に応じた学習の方法を工夫することと、過剰な内容の強制はさけなければならないが、それは単に興味や楽しさだけの、安易に止まるものであってはならないと思う。興味のある楽しい学習であるとともに、基礎的・基本的な事項の教授・学習が併存して、はじめて充実した学校生活と教育活動が期待できよう。

10%の僅な時間で、人間のゆとりを生み出せるものではなく、学校生活全体を通じて、特に普断の授業や日課を通して、考えなければならない問題であろう。ゆとりと充実、別個に考えるべきものではなく、健康で正常な人間形成の上では一体のものであり、等価的に考えるべきだと思う。

従って、「ゆとりのある充実した学校生活」は、授業の中でも、それ以外の教育活動の中でも、当然配慮し、工夫されなければならないものであろう。別な表現をすれば、人間の真性にもとづいた教育の本質に立った学校教育を、実現するよう努力しなければなるまい。

学校（スクール、シューレ）ということばの語源は、ラテン語のスコーラ、ギリシャ語のスコーレで、もともとは閑暇を意味する。ということは閑暇を有している貴族や富裕な商人たちの上層階級の子弟を教育するための学校であった。中世においてもしかり、また日本においても同様、貴族・僧侶や武士階級のものたちが学ぶ場所であったことは周知のことである。

然し、現代は国民の総ての子弟が義務づけられた教育であり（学校教育は）、特権的な閑のある階級の子弟のみを対象としたものではない。従って、学校それ自体の意味が、閑暇のあるもの学ぶ所という意義から変化してきている。むしろ学校は総ての人々が、人間として生きるために必要な教育の場であり、その意味で、現代の学校教育を考えた場合、ゆとりを単なる閑暇や時間の余裕と考えるよりも、「生きられる距離」としての「ゆとり」の概念を持つことが、私は妥当ではないかと考えたのである。

（昭・52・6記、53・1補稿）